



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	儒林外史論：関係について（中）III
Author(s)	須藤， 洋一
Citation	北海道大學文學部紀要， 36(2)， 47-93
Issue Date	1988-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33527
Type	departmental bulletin paper
File Information	36(2)_PR47-93.pdf



儒林外史論

——關係について——(中)——Ⅲ^①

須藤 洋一

目次

はじめに	
第一章 思想について	
第二章 關係について	
第三章 変貌について	
第四章 幻想について	
第五章 再び關係について	
第六章 祭りについて、または芝居について	
第七章 血縁について	
第八章 遊びについて	
第九章 漂泊について	
おわりに	

第六章 祭りについて、または芝居について（続）

（十一）

政治をもじる過程として、小説（『儒林外史』）を読む、というのが前回（第六章一—十）以来の課題である。

とりあえずは、小説に横行するニセモノのいく人かを取り上げ、かれらの△幻想▽、あるいはかれらと周囲の世界との関わり方を考えるのが当面の作業だが、これまでの段階で指摘しうる事柄はおおよそ三つ。第一はそこに共通する大きな枠組みの存在である。たとえばニセ仙人（洪憨仙）がもぐり込んだ先は、いわゆる仙界などでは決してなかった。同様に、ニセ詩人（牛浦）がもぐり込んだのも、詩人たちの世界ではない。かれらが入ろうとし、そして実際に入って行ったのは、それぞれに異なる世界ではなく、一貫して官僚あるいは名士の世界であり、それは要するに、「お空の星」（天上的星宿）たちの住む「晴れがましい」（榮耀）天上世界にはかならなかった。

一方、ニセ仙人らの正体が一介の商人であり、ニセ学者（匡超人）が無学の素顔を覗かせたように、かれらがあとにしようとしたのは、一樣に、天上世界を遙かに見上げる庶民、すなわち地上の世界である。一方に庶民の地上の世界があり、他方に官僚、名士たちの天上世界がある。その両極の間にあって、ニセモノたちは地上から一気に飛躍し、ひそかに天上世界にもぐり込む。

第二に、こうしたニセモノたちが飛躍のバネとするのは、かれらの△幻想▽——自己幻想——であり、△幻想▽の

表現としての演技である。小説では、かれらは演ずる者として描かれる。このうち、かれらがその△幻想▽において「並みの人間」（衆人）から遠ざかり、さらに自らの過去から遠ざかるとき、その極みに現われるのは、最も鮮かに変身する者としての官僚の像である。匡超人はこのような描かれ、牛浦はこの種の△幻想▽の可能性を探るために、実験的に、官僚世界へ送り込まれる。

そして第三、この小説では、ニセモノたちは容易にその正体を発かれることがない。ニセ仙人洪憨仙は、死ぬまでそのペテンを見破られなかった。支劍峰はついに正体を発かれたが、かれをニセ秀才と見破ったのは、周囲の秀才たちではなかった。匡超人は旅の客と読者の前に庶民の素顔を晒したが、しかしかれ自身は官僚世界の優等生として、これからも肩を聳やかして歩いてゆくはずである。とすれば、ここに、ニセモノと区別のつかないホンモノとは何であるのか、という疑問が湧く。

中でも目覚しいのは、小さなろうそく屋の息子、牛浦の活躍である。かれは拳人——「お空の星」——の前で有名な詩人を演じて破綻がなかっただけではない。義理のおじの卜兄弟を嘲笑し、逆に反撃を浴びた際、自らと拳人とを同列に置き、その結びつきを強調することによって、拳人もろとも地上に墜ちるのである。清代、一評者の激しい憎悪の的となった牛浦は、また、世界の秩序をかき乱すいたずら者としても、一級が存在であった。

以下、ニセモノたちの動きと、この世界に及ぼすかれらの働きとに注目しながら、引き続き、牛浦の物語を追うことにする。

(十一)

物語、後半は青年牛浦の遍歴である。匡超人同様、牛浦もまた旅をする。その流浪の旅の中で、牛浦は自身、ニセモノとして詩人を演じ続ける一方、また自らの外にニセモノを発見してゆく。かれが出会ったニセモノは三人。その出会いがそれぞれに惹き起こす三つの事件と牛浦自身が真偽を問われる一つの事件、都合四人のニセモノによる四つの事件が、牛浦の遍歴の核である。

まず第一の事件。

義理のおじ（卜兄弟）を見下して怒らせ、口論の果てに家を追われた牛浦は、江蘇安東県の知事となった董華人を頼って故郷の蕪湖を離れる。途上、牛浦は揚州行き船の中で牛玉圃と名のる五十過ぎの人物と識り合い、同姓の諒みで一族としての交わりを結ぶ。二人はそのまま同道、儀徴に立ち寄った折、牛玉圃は王義安と呼ばれる一人の旧友に再会する。牛玉圃同様、頭に「角帽子」（方巾）を戴く人物である。会話は二人が二十年來の盟友であること、ともに都の高官に厚く遇されていたことを明らかにする。

正説得稠密、忽見樓梯上又走上兩個戴方巾的秀才來。前面一个穿一件繭紬直裰、帽前油了一塊、後面一个穿一件元色直裰、兩個袖子破的晃晃蕩蕩的、走了上來。兩個秀才一眼看見王義安、那穿繭紬的道：「這不是我們這里豐家巷婊子家掌櫃的烏龜王義安？」那穿元色的道：「怎麼不是他？」他怎麼敢戴了方巾在這里胡鬧？」不由分説、走上去、一把扯掉了他的方巾、劈臉就是一個大嘴巴、打的烏龜跪在地下、磕頭如搗蒜、兩個秀才越發威風。

（折しもねんごろに話し込んでいると、突然、角帽子をかぶった二人の秀才が階段をのぼって来た。先の一人は絹の道士服をまとい、胸のところに油がべっとりついていて、あとの一人は黒い道士服で、両の袖が破れてヒラヒラしている。上って来ると、二人の秀才、王義安をひと目見て、絹服の方が、「こりゃわしらのところの豊家巷の女郎屋のおやじ、黒龜の王義安ではないか！」すると黒服「まさしくやつだ！ やつは何で角帽子なんぞかぶって、こんなところでふざけておるのだ！」有無をいわさず、近づいてサッと角帽子を引ったくり、いきなり大きなビンタを一発。ぶたれて黒龜、地べたにひざまずき、米つきバツタのように床に頭を打ちつける。二人の秀才はいよいよ図に乗って居丈高）：第二十二回

ニセ秀才が正体を発かれた話、として見れば、これは洪憨仙以来のニセモノたちの物語につながるものだが、しかし小説はここで、新たな段階に踏み込んだのだと見ていいだろう。それはひとえに、ニセモノの正体の並々ならぬ点に関わっている。

この事件で、「秀才」を装っていたのは「女郎屋」（烏龜）である。知られるように、「女郎屋」を含む特定の職業、出身については、当時、次のような規定が定められていた。

凡應試、洪武十七年定。……郷試、其學官、及罷閑官吏、倡優之家、隸卒之徒、與父母之喪者、並不許應試。⁽¹⁾
（科挙の受験に関しては、洪武十七年、次のように定めた。……郷試においては、府・州・県学の教官、および免職となった官吏、娼家・俳優を営む者、役所の使用人、また父母の喪中の者は、いずれも受験を禁止する）

これは小説が舞台とした時代Ⅱ明の例、次は作者の時代Ⅲ清の例である。

童生考試、有冒籍、頂替、倩代、匿喪、假捏姓名、身遭刑犯、及出身不正如門子・長隨・番役・小馬・阜隸・馬快・步快・禁卒・伴作・弓兵之子孫、娼優・奴僕・樂戸・丐戸・蠶戸・吹手、凡不應試者混入、認保派保互結之五童、互相覺察、容隱者五人連坐、廩保黜革治罪⁽⁴⁾。

(童生の試験において、戸籍の偽り、替え玉、代理、服喪匿^{かく}し、姓名詐称、前科、および出身の不正たとえば門番・従者・捕吏・刑吏・獄卒・検死係・番兵等の子孫、娼家・俳優・奴僕・樂戸・丐戸・蠶戸・樂人等、およそ受験資格のない者の混入があるときは、保証人および相互保証の五人の童生は、互いに発見につとめるものとし、これを隠匿した場合は五人連坐、保証人となった廩生は身分を剝奪して罪に処する)

いづれも科挙を受験することができない場合ないしは職業・身分を規定したものが、このうち、前者の「娼家・俳優を営む者、役所の使用人」(倡優之家、隸卒之徒)あるいは後者の「門番・従者……樂人」(門子・長隨……吹手)が受験を禁じられたのは、次に見るとおり、かれらが「賤民」とみなされたことによる。

四民爲良、奴僕及娼優隸卒爲賤。……凡衙門應役之人、除庫丁・斗級・民壯、仍列於齊民、其皂隸・馬快・步快・小馬・禁卒・門子・弓兵・伴作・糧差、及巡捕營番役、皆爲賤役。長隨亦與奴僕同⁽⁵⁾。

(四民を良とし、奴僕および娼家・俳優・役所の使用人を賤とする。……役所において使役される者は、銀庫

番・計量係・衛兵が平民に列せられるのは、刑吏・捕吏・獄吏・門番・番兵・検死係・租税徴収吏および京師警察署捕吏のいずれも賤役とする。従者もまた奴僕と同様である。

「四民」とは民籍、軍籍、商籍、竈籍（製塩業者）にある四者をいう。これが「良民」あるいは「平民」（齊民）と呼ばれるのに対して、「賤民」とされるのは、右の引用に見る通り、奴僕、娼家、俳優、役所の使用人などである（ここでは「奴僕」と「娼優隸卒」とを分けているが、一般には「奴僕」を「娼優隸卒」の中に含め、それによって「賤民」全体を代表させることが多い。このほか、特定の地域に楽戸、丐戸などと呼ばれる「賤民」が存在したが、ここでは触れない）。かれらはその「特殊な職業」のゆえに「特殊な階層に」属するとされた者であり、「一般人民」と肩を並べることのできない被差別の民であった。

差別はさまざまのかたちで現われる。身分ある者との同席を禁じられるのは、その日常の場における一つの例にすぎない。政治の場においては、差別は科挙の受験の禁止というかたちをとる。科挙は万人に開かれるのが原則であったが、「賤民」は例外的に受験を禁じられ、初めから官僚となる道を鎖されていた。かれらは社会の最下層に属する卑しむべき劣等者として、政治の場、すなわち科挙の世界ないしは官僚世界から排除され、内部に踏み入ることを厳しく禁じられていたのである。

「女郎屋」王義安の登場は、小説の流れの中で、一つの期を画するものだといってよい。「良民」、「平民」を地上の存在だとすれば、「賤民」は「地下」の存在である。奴僕が俗に「底下人」アイレンと呼ばれるのは、かれらの置かれた位置を象徴するものでもあるだろう。官僚らの世界がもう一つの世界であるように、「並みの人間」である庶民にとって

は、「賤民」の世界もまた、もう一つの世界にはかならなかった。「賤民」王義安の登場によって、小説は、「地上」と「天上」の世界から、さらに「地下」のそれへ、世界の枠組みを拡大しているのである。

ニセモノは、その正体は何者であれ、それ自体が一つの事件であり、醜聞であるにちがいない。しかしニセ秀才の正体が「平民」であるか「賤民」であるかでは、事件あるいは醜聞としての性格には、比較にならぬ違いがあるだろう。加えてこの事件では、醜聞は、時間的にも空間的にも広がる気配を見せている。たとえば、今現に繰り広げられたニセ秀才の暴露事件を第一とすれば、逆に、つい今しがたまで「賤民」が「秀才」と同席し、「秀才」を演じて些かの破綻もなかったというのが第二、そして第三には同じく「賤民」が「秀才」と久しく親交を結び、高官のもと、「お上」の内部でそれと知られずに大きな顔をしていたという過去のありよう——それ自体が一つの事件として仄見えてくる。発かれた事件の主役はニセ秀才王義安である。だが、発かれなかった事件のそれは、むしろホンモノの「秀才」牛玉圃と、さらに広く「科挙」世界全体とっていいだろう。それらは小説の中で、単に過去あるいは遠景の事件としてとどまるのか、どうか。

小説は、女郎屋王義安を徹底して卑しく惨めなものとして描く。「黒亀」（烏龜）とは、ここでは女郎屋を意味することばだが、身を縮めて地に伏せる亀のイメージは失われていない。かれは「角帽子」（方巾）を剥ぎとられ、女郎屋としての正体を現わしたとたん、天上に舞い上がるための翼を失い、同時に人間としての名を失って、地を這う一匹の小動物と化する。だが、変貌するのは果して王義安だけであつたか。

牛玉圃走上去扯勸、被兩個秀才啐了一口、說道：「你一个衣冠中人、同這烏龜坐著一桌子喫飯、你不知道罷了、既知道、還要來替他勸開、連你也該死了。還不快走、在這里討沒臉！」牛玉圃見這事不好、悄悄拉了牛浦、走下樓來、會了賬、急急走回去了。這里兩個秀才把烏龜打了个臭死、店裏人做好做歹、叫他認不是。兩個秀才總不肯住、要送他到官。落後打的烏龜急了、在腰間摸出三兩七錢碎銀子來、送與兩位相公做好看錢、纔罷了、放他下去。

（牛玉圃が歩み寄って取りなそうすると、秀才二人にベツとつばを吐きかけられ、「身分ある紳士が、こんな黒龜と同じ席で飲み食いしておって！ 知らなんだというならそれまでだが、それと知ってまだやつのために何のかのと庇い立てするなら、貴様もただでは済まんぞ。とっとと失せろ。まだ恥をさらしたいのか！」牛玉圃はこれはまずいと見てとり、コソコソと牛浦を引つ張って下におりると、勘定を済ませ、慌てて逃げ帰って行つた。こちらでは秀才二人、黒龜を打ちすえ、こっぴどくぶちのめしてしまった。店の者がおどしたりすかしたりして詫びを入れたが、二人の秀才、いっかな手を引こうとせず、役所にしょっぴこうと言ひ立てる始末。しまいにはぶちのめされて黒龜たまらず、腰から三兩七錢の粒銀を探り出し、秀才ご兩人に差し出して、これが袖の下という次第、ようやくケリをつけて放してやった）：第二十二回

変貌するのは王義安だけではないようだ。例えば面と向かつてツバを吐きかけられ、罵倒された牛玉圃。かれが二人の「秀才」から受けた仕打ちには、王義安が二人から受けた仕打ちと何ほどの違いもないといつてよい。牛玉圃は「賤民」として追放されたのだといえはいい過ぎだが、しかし少なくとも、かれは、さながら「賤民」のように、二

人の「秀才」の前から追われたのである。

牛玉圃に対する「秀才」らの態度以上にかれの変貌を物語るのは、牛玉圃自身の態度と行動である。かれは形勢不利と見てとると、二十年來の旧友を見殺しにして逃げ出す。この離反劇はいうまでもなく、一連の八関係幻想の線上につながるものだが、それとともに、ここではかれの負け犬のような惨めな退散ぶりが際立っている。罵倒されたまま、身を縮めて階段を駆け下りてゆく牛玉圃の後ろ姿は、その卑屈さにおいて、「黒亀」王義安の土下座姿と一つに重なるのである。

では二人の「秀才」の方はどうか。かれらは凄まじい気迫で、ニセ秀才を「科挙」の世界から引きずり出し、排除する。王義安の卑屈さとは対照的に、二人はあくまで尊大である。その尊大と卑屈の対照の中に、科挙の内側にある者と外側に排除されてある者の対照はあるだろう。それはまた、両者を隔てる壁の厚さ、距離の遠さを印象づけるものだ。

しかしかれらが王義安をひたすら責め続ける中で、光景は微妙に、そしてついには大きく変わってしまったように見える。たとえば「秀才」二人による制裁の場面。胸元に油垢を光らせた絹服の男と、両袖破れた黒服の男とが、よってたかって、土下座する「黒亀」を殴り続けるのである。それはもはや、「身分ある紳士」(衣冠中人)が自らの世界から「賤民」を追放する光景とはいいい難い。そこに見えるのは、ただ、似たような者同士のみ合い、あえていえば一種の八混沌のようなものだろう。そして異様に長々しい打擲の果て、「黒亀」からまいにちを受け取ってケリという、フィの狎れ合い。二人が王義安を執拗に追い、追い詰め、絡み合うとき、かれらもまた、王義安と同じ暗部に墜ちているのである。

第一の事件で起った事柄は何か。表面上のこととしていえば、事件はニセモノが正体を發かれ、いためつけられたというだけのものだ。しかしニセ秀才王義安は、ただそれだけのために現われ、消えるのではない。王義安は自らが汚点として暴露されることによって、逆に、自らを包み込んでいた世界の汚点を暴露する。あるいは、自身が「黒亀」に変貌することによって、自らを排除した世界をも、黒ずんだものに変貌させる。ニセ秀才王義安との関わりにおいて初めて、「秀才」の胸元にしみついた汚点は、「科擧」世界に内在する汚点を象徴するものとして、見えてくる。ニセモノが通り過ぎたあと、世界は次第に境界をあいまいにしてゆくようだ。

(十三)

長江北岸、大運河に臨む都市揚州は、明清時、塩業をはじめ、物資の集散によって大いに賑わい栄えたまちである。牛浦の旅第二の事件は、この塩都揚州を舞台に繰り広げられる。

船を下り、宿をとった牛浦と牛玉圃の二人は、翌日、玉圃のバトロン万雪齋の屋敷をたずねる。

次日早晨、拏出一頂舊方巾和一件藍紬直裰來、遞與牛浦道：「今日要同往東家萬雪齋先生家。你穿了這個衣帽去」。

(翌朝、牛玉圃は古い角帽子を一つと青い絹の道士服を一着取り出し、牛浦に渡して、「今日は一緒にご主人の万雪齋様のお宅に伺うのじゃ。お前はこの服と帽子をつけて行け」：第二十二回

牛玉圃はつい今しがた、ニセ秀才が「角帽子」をむしり取られ、大騒ぎになった現場にいたばかりなのだが、ここではないとも簡単に、牛浦を秀才に仕立てている。大騒ぎの中では、「科挙」の壁はいかにも厚く見える（ただし、王義安との絡み合いの中で、境界が次第に影を薄くしていったことは、先に見た通り）が、このさりげなさの中では、壁はどこにあるとも見えない。

第二の事件との関わりでいえば、ここでは、牛浦が来たるべき場に合わせて、服装を改めていることに注目しておきたい。かれが衣裳を変えねばならなかった、いいかえれば「演技」を求められた万雪斎の屋敷とは、どのような場所であったか。

一直來到河下、見一个大高門樓、有七八个朝奉坐在板橋上、中間夾著一个奶媽、坐著說閒話。轎子到了門首、兩人下轎、走了進去。那朝奉都是認得的、說道：「牛老爺回來了。請在書房坐」當下走進了一个虎座的門樓、過了磨磚的天井、到了廳上。舉頭一看、中間懸著一个大匾、金字是「慎思堂」三字、傍邊一行「兩淮鹽運使司鹽運使荀政書」。兩邊金箋對聯、寫：「讀書好、耕田好、學好便好。創業難、守成難、知難不難」中間掛著一軸倪雲林的畫、書案上擺著一大塊不會琢過的璞、十二張花梨椅子。左邊放著六尺高的一座穿衣鏡。從鏡子後邊走進去、兩扇門開了、鵝卵石砌成的地。循著塘沿走、一路的朱紅欄杆。走了進去、三間花廳。隔子中間、懸著斑竹簾、有兩個小兒在那裡伺候、見兩個走來、揭開簾子讓了進去。舉眼一看、裏面擺的都是水磨楠木桌椅、中間懸著一个白紙墨字小匾、是「課花摘句」四个字。

（まっしぐらに河下〔街の名。次節参照〕までやって来ると、高く聳える大きな樓門が目に入った。使用人が

七、八人、腰掛けに腰をおろし、中に一人、子守り女をはさみながらお喋りをしている。門口に着くと、二人は轎を下り、中に入って行った。使用人たちは皆顔見知りの者ばかりで、口々に、「牛様、お帰りなさいまし。どうぞ書斎の方へ」すぐさま虎の置き物を据えた棧門をくぐり、なめらかな煉瓦敷きの中庭を通って、広間にやって来た。顔を上げて見ると、中央に大きな額が懸けられ、金文字で「慎思堂」の三字、そばに一行「兩淮塩運使司塩運使荀政書」と署名がある。両側は金地の対聯で、「書を読むはよろしく、田を耕すはよろしけれど、よろしきを学べばすなわちよろし。創業は難く、守成は難けれど、難きを知れば難からず」とある。正面には倪雲林「元の画家」の画が掛かり、文机の上には、大きな玉の原石がひとかたまり。周囲に花梨の椅子が十二脚。左手には六尺大の姿見が置かれ、鏡の奥を入って行くと、両開きの扉があげ放たれ、一面、玉石を敷きつめた庭が広がっている。池のふちに沿って歩いてゆくと、どこまでも朱塗りの欄干が延び、その奥に、周囲を花園にかこまれた間口三間の明るい応接室が建っている。飾り扉には湘妃竹のすだれが懸かり、中に小者が二人控えていて、二人がやって来るのに気づくと、すだれを上げて招じ入れた。目を上げて見ると、中に並んでいるのは、いずれも精巧な楠のテーブルと椅子で、中央には白い紙に墨で記した小さな額が懸かり、「花を課し句を摘む」の文字がある）：第二十二回

ここにあるのは、豪莊華麗な邸宅の内部と、その一つ一つに眼を引きつけられずにはいない、貧しい庶民の驚きの眼である。それは、明らかに小商人としての牛浦の眼であって、清代の評者がこの部分を「牛浦の貧しい眼から見たもの」(從牛浦窮眼看)とするのは、的確な指摘といふべきだろう。この場面、読者の前に現われるのは、万雪齋

の広大な屋敷と贅を尽くした細部の数々だが、しかしその手前では、牛浦が、楼閣や調度の一つ一つに眼を見張って立ち竦んでいるのである。

牛浦は牛玉圃とともに楼門をくぐり、中庭を通過して広間に入る。さらに広間の横手から庭に抜け、池の端を欄干沿いに延々と歩いて、花園の中の応接室に辿り着く。確かに、この屋敷は奥が深い。しかし牛浦が入り込んだ空間は、ここにその足どりを要約した空間よりも、遙かに奥が深かったという印象が強い。

中国の建築の伝統に従えば、こうした奥の深さが象徴するのは、内部の世界と外部の世界との距離である。邸宅の奥行きは、主がいかに地上（庶民の世界）から隔絶した高みにあるかを表示する。この奥行きを演出するのは、空間の物理的な広さというより、むしろ障壁の存在であるが、この場合、視線を遮るべき壁は、文字通りの壁とは限っていない。庭園の築山も、一本の樹木も、あるいは一枚の布も、壁でありうる。牛浦にとっては、万雪斎の邸宅内に配置されたものすべてが、壁であった。高大な楼門、虎の彫像、中庭の滑らかな煉瓦敷き、広間の大きな額、金地の対聯、倪雲林の掛け軸、玉の原石の塊り、花梨の椅子、六尺大の姿見等々……。そうしたものの一つ一つが牛浦によって凝視されるとき、それらは自体、一つの障壁として眼の前に立ちはだかる。万雪斎の屋敷は、こうした壁で満たされることによって、牛浦の前に異様に奥深い空間として現われるのである。それは、この邸宅が「地上」から異様に遠い、一つの「天上世界」として現われていることを意味しよう。

むろん、これら邸内の楼閣、調度その他は、奥深さを演出するためだけに置かれていたのではなく、それ自身としての意味をもたって配置されているだろう。たとえば、あるものは財力を誇示し、あるものは学問の香りを漂わせ、またあるものは政治的権力との結び付きを暗示、あるいは明示するという風に。それらは、奥行きとはまた違

う角度から、この空間の「天上世界」としての性格を演出しているはずである。中でも興味深いのは、広間の壁を飾る金地の対聯で、その後半の句「創業難、守成難、……」は、明らかに唐の太宗（在位六二七—六四九）と房玄齡、魏徵の会話を受けるものだ。三人の発言は、太宗と群臣との政治的問答の書『貞觀政要』あるいは『十八史略』等によって広く知られるが、この句と直接につながると思しい『十八史略』によれば、会話は次のように記される。

嘗問侍臣：「創業守成孰難」玄齡曰：「草昧之初、羣雄竝起、角力而後臣之。創業難矣」魏徵曰：「自古帝王、莫不得之於艱難、失之於安逸、守成難矣」上曰：「玄齡與吾共取天下、出百死得一生、故知創業之難。徵與吾共安天下、常恐驕奢生於富貴、禍亂生於所忽、故知守成之難。然創業之難往矣。守成之難、方與諸公慎之」⁽⁸⁾

（あるとき、帝が左右の大臣に尋ねられた。「国家の大業を創めるのとこれを守るのでは、いずれが困難であろうか」房玄齡が答えた。「天下が一つになります前は、各所に群雄が立ち、互いに力を競わねば、これを従えることはできません。創業の方が困難であります」魏徵が答えた。「昔から帝王は皆、艱難のうちに天下を得、安逸のうちにこれを失うのが常でありました。守成の方が困難であります」そこで帝は言われた。「玄齡は余とともに天下を取り、百死の中に一生を得た。だからこそ創業の困難を知っておるのだ。徵は余とともに天下を治め、富貴によって驕り高ぶり、油断がもとで世が乱れるのを常々案じておる。だからこそ守成の困難を知っておるのだ。だが、創業の困難はすでに去った。守成の困難は、これより、そち達とともに用心せねばならぬ」

ここに見るように、太宗ら三人の発言中、「創業守成」は国家の創建と維持を指すことばとして語られたものだ。『貞觀政要』では冒頭さらに「帝王の事業」(帝王之業)といい、意味はより明瞭である。⁽⁹⁾「創業」「守成」いずれも、時に、より広く事業一般を指すことがあり、対聯の句に近い言い回しも、一種の成語ないしは俗諺として一般に用いられるが、発言の骨組みをそのままとどめるこの対聯の句自体は、意味の上でも、原意——太宗らがその文脈の中でこめた意味を仮にそう呼ぶ——を色濃くとどめるものと見ていいだろう。清代の評者が重ねてこの対聯に興味を示す⁽¹⁰⁾のも、「創業……守成……」の句にまといつく、この特殊な意味に着目してのことであつたにちがいない。とすれば、万雪斎の邸宅の壁を飾る金地の対聯、あるいは邸宅の全体、引いては万雪斎自身、の背後には、「国家の創建と維持」ないしは「帝王」の影がちらつくのである。これは一体、どういうことか。

牛浦を「天上世界」に導いたところで、小説は主の登場である。

兩人坐下喫了茶、那主人萬雪齋方從裏面走了出來。頭戴方巾、手搖金扇、身穿沈香繭紬直裰、脚下朱履、出來同牛玉圃作揖。

(二人が席に着いて茶を飲み終えると、ようやく主人の万雪斎が奥から現われた。角帽子を頭に戴き、金色の扇を手に揺らし、沈香色の絹つむぎの道士服を身にまとい、足には朱色の靴といういでたち。近寄って牛玉圃と挨拶をした)：同

「角帽子」(方巾)は例によって「秀才」(あるいは秀才以上)のシンボル。「沈香」⁽¹²⁾色は黄を主とし、灰色、淡紅色がまじる。牛玉圃の「角帽子を頭に戴き、沈香色の絹の袷あきの道士服を身にまとい、白底の黒い靴をはき、白い扇を手に持ち、……」(頭戴方巾、身穿沈香色夾紵直裰、粉底皂靴、手擎白紙扇——第二十二回)といういでたちと比べると、帽子と道士服が同じであるほかは、万雪齋の衣裳の華やかさが目立つ。

一方、牛玉圃は万雪齋を相手に、南京での己れの名声を誇り、中山王府徐公子の歓待ぶりを自慢する。玉圃の語りが主として描くのは、上流社会(天上世界)の名士としての自身の像だが、かれは万雪齋への徐公子の傾倒を伝えて、万雪齋もまた、名士の一人にほかならぬことを印象づける。これに対して、固くなった牛浦はひとことも口をきくことができない。食事前の散策に出た折、かれは邸内に立ち並ぶ大小さまざまな樓閣群を前に、さらに惨めな失敗を犯す。

牛玉圃走著回頭過來、向他說道：「方才主人問著你話、你怎麼不答應？」牛浦眼瞪瞪的望著牛玉圃的臉說、不覺一脚蹣了个空、半截身子掉下塘去。牛玉圃慌忙來扶、虧有柳樹攔著、拉了起來。鞋襪都濕透了、衣服上淋淋漓漓的半截水。牛玉圃惱了、沉著臉道：「你原來是上不的臺盤的人」忙叫小廝毡包里拏出一件衣裳來與他換了、先送他回下處。

(歩きながら玉圃が振り返り、牛浦に、「さっき主人がお前に尋ねたとき、どうして答えなかったのだね」牛浦は眼をまるくして玉圃の顔を見つめていたが、口を開こうとしたとたん、思わず足を踏みはずし、池の中に体半分落っこちてしまった。慌てて玉圃が手を貸し、柳の木につかまって引き上げたが、靴も靴下もずぶ濡れで、着

物も下半分がぐっしょり。玉圃は腹立たしさのあまり、ムツとした顔で、「お前はもともと、晴れの場所にはのぼれぬヤツだったのだ」急いで小者に包みの中から着物を持って来させ、牛浦に着替えさせると、先に宿へ送り帰した）：同

新たな衣裳をまとして「晴れの場」(臺盤)にのぼった牛浦は、水に落ちて衣裳をよごし、「晴れの場」を追われる。しかしニセ秀才として「秀才」を演じなければならなかった牛浦は、まともに口をきくことができなかった時点で、いいかえれば、せりふを忘れ、ことばを失った時点で、すでに役者を失格していたのだといえる。水中への転落は、そうした牛浦の失格を象徴するものであった。と同時に、それはまた、かれの「天上」から「地上」への転落を意味するものでもあるのである。

牛浦にとってこの転落は、具体的には饗宴からの疎外、すなわちご馳走を横目に見ての空腹、として現われる。「晴れの場」を意味する「臺盤」が、本来、「食物を盛る台、食卓」を意味することは興味ある事実だが、ともかく、牛浦は万雪斎の邸宅という「晴れの場」を追われると同時に、食事の席からも追われねばならなかった。食事抜きのまま宿に帰された牛浦は、怒りで腹わたが煮えくり返ったまま、「まるまる半日もひもじい思いをした」(足足的餓了半天)揚句、「万家で夜更けまで飲み続け、ようやく帰って来た」(在萬家喫酒、直到更把天纔回來)玉圃から、説教だけはこっぴどく食らう羽目になるのである。

(十四)

三日目、万家の招待を受けた牛玉圃は、牛浦に留守番を命じ、一人で万雪斎の屋敷に向かう。またしても宴席から締め出された牛浦の方は、暇をもて余し、宿の道士に同道をせがんで、一軒の茶館に案内される。

牛浦道：「我這東家萬雪齋老爺、他是甚麼前程？將來幾時有官做？」道士鼻子里笑了一聲道：「萬家、只好你令叔祖敬重他罷了。若說做官、只怕紗帽滿天飛、飛到他頭上、還有人撚了他的去哩！」牛浦道：「這又奇了。他又不是倡優隸卒、爲甚那紗帽飛到他頭上、還有人撚了去？」道士道：「你不知道他的出身麼？我說與你、你却不可說出來。萬家他自小是我們這河下萬有旗程家的書童、自小跟在書房伴讀。他主子程明卿見他聰明、到十八歲上、就叫他做小司客。……他做小司客的時候、極其停當、每年聚幾兩銀子、先帶小貨、後來就弄窩子。不想他時運好、那幾年窩價陡長、他就尋了四五萬銀子、便贖了身出來、買了這所房子、自己行鹽、生意又好、就發起十幾萬來、萬有旗程家已經折了本錢、回徽州去了。所以没人說他這件事。……」

（牛浦「うちのご主人の万雪斎様ですが、あの方はどんな学歴をお持ちなんですか。あとの位で官途につかれるでしょう」すると道士は鼻で笑って、「万さんですって？　ありやお宅のおおじさんが持ち上げているだけですよ。官途というなら、たとえ絹の官帽が空一面に飛んで、あの人の頭に落ちて来たところで、誰かがひっさらって行ってしまいますよ」牛浦「これはまた異なこと！　あの方は女郎屋でも役者でもないのに、どうして頭の上に落ちて来た官帽を引ったくられるんです」道士「あなたはあの人の出身をご存知ないんですか。なら教

えてあげましょう。でも、口に出しちゃいけませんよ。万さんは小さい時から、この河下街の万有旗の程家の小者になり、書齋でご主人の子供の勉強のお供をしていたんです。主人の程明卿は、あの人の賢さを見込んで、十八、九の頃、小秘書にとりたてました。……小秘書をしていた当時、あの人は実に抜かりのない仕事ぶりで、毎年、何両かの金をたくわえ、最初は店の商売のついでに自分の商いをしていたんですが、そのうち塩の専売の權利書を借りて稼ぐようになりました。ところがこれがまあツいていまして、数年の間に權利書の値がはね上り、あの人は四、五万両もの金を手に入れてしまったんです。そこで自分の身を請け出して自由になり、あの屋敷を買って自分で塩を商うことにしたんですが、この商売がまたうまくいって、十数万両も儲けてしまいました。万有旗の程さんの方は、とくに元手まですって徽州に帰ってしまったような次第で。ですから、この一件を口にするものは誰もいやしません。……」：第二十三回

道士がここで語っているのは、万雪齋の「出身」と、塩都の繁栄を背景とした、塩商人としてのかれの成長あるいは変貌の軌跡である。それは万雪齋にとっては暗い過去であるが、一面ではまた、現在のありようを可能にした、上昇飛躍のからくりでもあるだろう。

道士によれば、万雪齋は過去、「書齋付きの小者」（書童）すなわち奴僕の少年であった。すでに見たように、女郎屋と並んで、奴僕もまた「賤民」あるいは「賤業」に数えられるものの一つである。「賤民」であった者は職業を改め、「良民」の籍に移ったのちも、「科挙」の世界に踏み入ることを禁じられる。奴僕の出身である万雪齋は、官途につくことはむろん、「科挙」の試験——予備試験としての「秀才」の試験も含めて——を受けることもできず、した

がつて、「絹の官帽」（紗帽）だけでなく、「角帽子」（方巾）さえも頭に戴くことはできない。

とすれば、万雪斎が牛浦と玉圃の前に「角帽子」をつけて現われたとはどういうことか。いうまでもなく、「秀才」ならぬ者、というより受験資格すらない者が「秀才」を騙り、演じているというにほかならぬだろう。ここで牛浦は、王義安に続く二人目のニセ秀才に対面しているのである。

「賤民」出身のニセ秀才を主役とする点で、第二の事件は、第一のその延長上にあると見ることができる。では、ここでもニセ秀才は正体を発かれるのだろうか。

先ほどの引用の中で、道士は次のようなことを語っていたはずである。すなわち、万雪斎を持ち上げているのは牛玉圃だけだということ。そして、万雪斎の過去を口にするものは誰もいないのだということ。道士の語りから、万雪斎をめぐる注目すべき情況が浮かび上がってくる。つまり、牛玉圃を別とすれば、ここではすべての者が万雪斎の過去を知っているのであり、にもかかわらず、すべての者があえて口をとざし、知らぬふりを装っているのである。万雪斎は「秀才」ないしは「天上」の人物を演じ、周囲の者はこれを持ち上げる役を演ずる。かつての「賤民」を主役とし、使用人、近隣らを含む多くの人間をわき役とする大がかりな△芝居▽が、実は牛浦の前で演じられているのである。

舞台は万雪斎の屋敷である。邸内に配置された数多くの楼閣と贅沢な調度の数々、大小の匾額が、この△芝居▽のための舞台装置である。しかしそれにしても、なぜ万雪斎はニセモノとして発かれることがないのか。かれの周囲の者が口をとざし、共同で△芝居▽を成り立たせているのはなぜか。先の引用に続く道士の語りが、そのからくりを示唆しているように思われる。

「……去年萬家娶媳婦、他媳婦也是个翰林的女兒、萬家費了幾千兩銀子娶進來。那日大吹大打、執事燈籠就擺了半街、好不熱鬧。到第三日、親家要上門做朝、家里就唱戲擺酒、不想他主子程明卿清早上就一乘轎子擡了來、坐在他那廳房里。萬家走了出來、就由不的自己跪著、作了幾個揖、當時兌了一萬兩銀子出來、纔餉的去了、不曾破相」

「……去年、萬家では息子に嫁をとったんですが、この嫁というのがまた翰林のお嬢さんでして、萬家では嫁に迎えるのに数千両の金をかけたもんです。当日は鳴り物もにぎやかで、行列の旗や燈籠が街半分を埋めてしまいい、それはえらい賑わいでした。三日目に花嫁の親が挨拶に見えて、屋敷では芝居やら宴会やらの最中だったんですが、突然、前の主人の程明卿が朝っぱらから轎で乗りつけ、客間に上がり込んでしまったんです。万さんは奥から出てくるなり、思わず跪いてペコペコしてしまう有様で。それが、すぐさま一万両の金を包んだおかげで、やっとうやむやにして帰ってもらい、醜態をさらさずにすんだってわけです」：同

万雪齋にとって、程明卿は、いわば△過去▽から来た人間である。第一の事件で王義安の正体を発いた二人が、「豊家巷の女郎屋」という、その本来の居場所——空間の秘密を握る人物であったとすれば、程明卿は万雪齋の「出身」という、時間の秘密を握る人物であったということが出来る。

いずれにせよ、その正体を知る人物が、ニセモノにとって重大な脅威であることはいうまでもない。王義安にとって、二人の秀才の出現が「天上世界」からの転落を意味したように、万雪齋にとって程明卿の出現は、自らを△過去▽へ引き戻し、「地上」さらには「地下」へ突き落しかねない危険なものであった。実際、かれは、王義安が二人の

秀才の前で這いつくばったように、かつての主人の前で思はず床に跪いてしまうのだが、そうした万雪斎の行動は、奴僕としての△過去▽に帰りかけた、かれの危機的な位相を示すしぐさであったにちがいない。¹³⁾

しかしかれは大金を積んでこの危機を切り抜ける。富の力によって△過去▽を遠ざけ、ひび割れた△現在▽を修復する。あるいは転落を免れて再び「天上」に舞い上がる。万雪斎をして奴僕の身分から脱出させ、広大な邸宅の主とした巨大な富の力、高官との縁組みによってかれをより遥かな高みに引き上げた力は、ここではまた、△過去▽の噴出を封じこめる力として働いているのである。

おそらく、舞台装置としての万雪斎の邸宅は、こうした力を日常的に働かせる場として演出されているはずである。そこにあるのは楼閣、調度など夥しい数の△もの▽だが、それらの△もの▽が表現するのは富豪、上層社会の一人としての万雪斎の△現在▽であって、「賤民」としての△過去▽ではない。△現在▽のみを主張する△もの▽によって△過去▽は遮られ、完全に封じこめられてしまっている。富の力が△過去▽の人間程明卿の口を封じたように、装置としての△もの▽たちが△過去▽を封ずるとき、空間はまばゆく巨大な△現在▽によって支配され、見る者を圧倒するだろう。牛浦がことばを失ったのはこのような瞬間である。そしてまた、このような空間において初めて、「天上」の人としての万雪斎の△劇▽は、かれ個人のものではなく、集団的な、共同の△劇▽として成り立つのである。

(十五)

第二の事件、最初の現場は万雪斎の屋敷、次の現場は一軒の茶館である。読者は万雪斎の屋敷でかれの△現在▽を見、茶館で道士からかれの△過去▽、ないしは△過去▽から△現在▽に至る経歴を聞く。

△現在▽から△過去▽に遡るとき、まばゆい衣裳や巨大な装置の向うに、万雪斎の小さなからだが見えて見えるはずである。あるいは△劇▽は△劇▽として、すなわち一個の虚構として見えてくるだろう。逆に△過去▽から△現在▽に辿るとき、そこに現われるのは、万雪斎の変貌、肥大の過程である。△劇▽はそこで、自らが成立するからくりを明らかにする。この事件を通して、読者は天上世界の内部に「賤民」出身者による大がかりな△芝居▽を見ることができ、また、「賤民」がいかにしてこの△芝居▽を可能にしたかを見ることが出来る。いずれにしても、この事件では、△過去▽が現われることなしには、事件の発生も△劇▽の発見もなかったといっている。いったん封じ込められた△過去▽が蘇るのはどのような空間であったのか——ここで今一度、くだんの茶館に戻ることにしたい。

衣裳をよごし、舞台（万雪斎の邸宅）を追われた牛浦は、道士に連れられて「旧市街に入」（進了舊城）り、一軒の茶館に案内される。「旧市街」（舊城）とは、元から明にかけて発達した、揚州の西半分を占める区域である。これに対して、明の嘉靖年間に新たに囲い込まれた東側の区域は「新市街」（新城）と呼ばれ、市場や各地の会館、作業場などが軒をつらねる商人と職人の街であった。清の李斗は『揚州画舫録』に次のように記している。

多子街即緞子街。兩畔皆緞舖。⁽¹⁵⁾

（多子街とは緞子街のこと。通りの両側はみな絹織物の店である）

埂子上一爲鈔關街。北抵天寧門、南抵關口。……其上兩畔多名肆。⁽¹⁶⁾

（埂子上はまた鈔關街ともいう。北は天寧門〔図1の拱辰門〕に至り、南は税関に至る。……その上手の両側

には名のある店が多い。)

翠花街、一名新盛街。在南柳巷口大儒坊東巷内。肆市韶秀、貨分隄別。皆珠翠首飾舖也。……硝消皮襖者、謂之毛毛匠。亦聚居是街。⁽¹⁷⁾

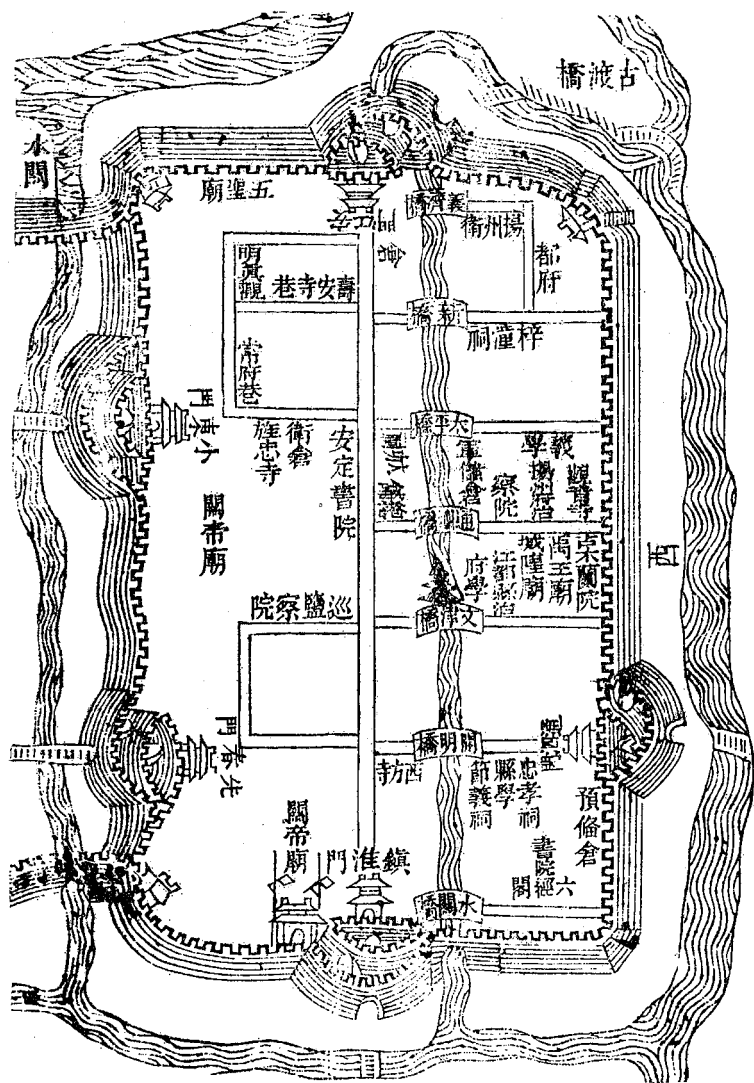
(翠花街はまた新盛街ともいう。南柳巷口大儒坊東巷内にある。店舗は美しく、商品や通路はきちんと区別され、いずれも宝石や髪飾りの店ばかりである。……毛皮の衣服をなめす者を毛毛匠〔皮職人〕といい、やはりこの通りに集まって住んでいる。)

多子街、埂子上、翠花街、いずれも「新市街」にある通りの名である。春秋以来の古都としての揚州を伝えるのが「旧市街」であるとすれば、「新市街」は活気に満ちた商業都市としての揚州を示すものであった。両者は東西に隣接する一方、それぞれが城壁に囲まれる独自の空間をかたちづけていたのである。(図1⁽¹⁸⁾参照)

茶館に向かう途中、城門を抜け、「新市街」から「旧市街」へ入ったという牛浦の歩みは、その意味で、いかにも象徴的な行為といえるだろう。畢竟、牛浦はこの時点で、もう一つの異質な空間に足を踏み入れているのである。

ところで肝腎の茶館に向かう前に、もう一つ、話題の主である万雪斎の屋敷の位置を確認しておこう。小説では、かれの邸宅は「河下」^{ハシジ}と呼ばれる場所にあるとされる。先の李斗はその位置について次のようにいう。

鈔關東沿内城脚至東關、爲河下街。自鈔關至徐寧門、爲南河下。徐寧門至關口門、爲中河下。關口門至東關、



(江都縣城原圖)

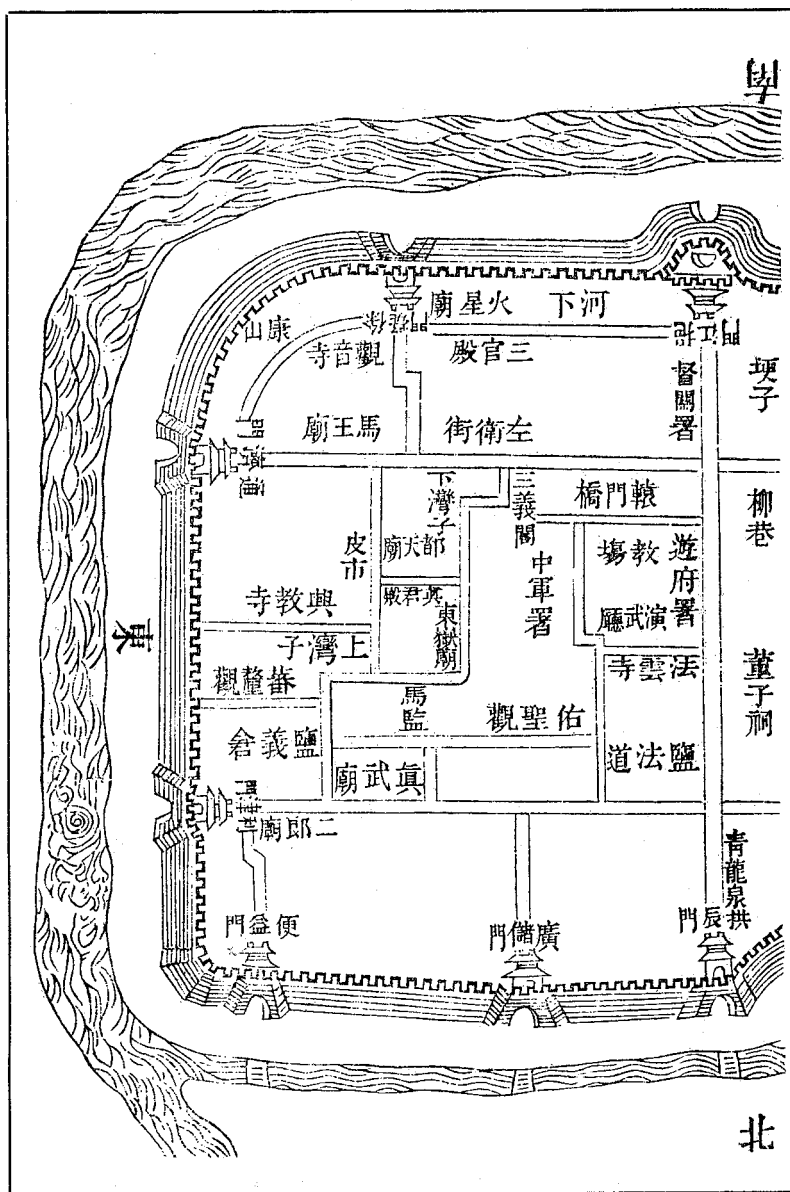


圖1 清代揚州市街圖

爲北河下。計四里。⁽¹⁹⁾

(鈔関〔図1——以下同様——の挹江門〕の東から内城の城壁のきわに沿って東関〔利津門〕まで、これを河下街という。鈔関から徐寧門〔徐凝門〕までを南河下という。徐寧門から關口門〔通濟門〕までを中河下という。關口門から東関までを北河下という。合わせて四里である)

これによると、図の挹江門(鈔関)から利津門(東関)まで、「新市街」の城壁の内側に沿って、南から東へ直角に折れ曲がった一帯が「河下」と呼ばれる区域である(図1の「河下」は李斗のいう「南河下」に当る)。この運河沿いの街は、明・清時、どのような賑わいを見せていたか、あるいは経済的にどのような位置にあったか。

運河は市街の東から南にかけて流れ、一帯は商業の中心地に発展した。小東門・鈔関・東関街・河下街の一帯は最も繁栄し、埠頭・倉庫・旅館・飲食店などが集中していた。大商人も多くこの一帯に住まい、庭園風の大規模な屋敷を数多く築いたが、そこに用いられた建築の材料は極めて華美で高価なものであった。⁽²⁰⁾

当時の揚州は、江南を代表する商業都市であったが、その繁栄を支えたのは、南は長江を経て杭州に、北は遠く北京に通ずる大運河である。運河沿いの街である「河下」が、揚州の中でも最も繁華で富裕な地区の一つとして賑わったのは、極めて当然といえるだろう。埠頭や倉庫、あるいは豪壮な邸宅の集中するこの一帯は、大商人が財力を競う場であると同時に、塩・食糧・絹織物など、膨大な産物の集散によって繁栄する、揚州自身の檣舞台でもあった。万

雪斎はここで自らの△現在▽を誇示したのだが、それはまた、揚州にとっても、その商業都市としての自らを誇示すべき、最も△現在のな場所であったのである。

それでは、牛浦が案内された茶館は、どのような場所にあったか。「話していると、木蘭院から道士が二人出て来て云々」(正説著、木蘭院里走出兩個道士來、——第二十三回)という小説の記述から、茶館は木蘭院と目と鼻の距離にあったと考えることができる。木蘭院は晋の遺刹と伝えられ、唐、王播の碧紗籠の故事で名高い仏寺である。古く蒙因顕慶禪院と称していたが、南朝宋の元嘉十七年(四四〇)、慧照寺と改め、唐の先天元年(七一二)、さらに安国寺と改名、同じく唐の乾元中(七五八—七六〇)、木蘭院となった。場所は西門外とも、また唐代、「羅城」あるいは「大城」と称した区域内、現在の揚州市の北六、七里、桑樹脚と呼ばれる地点ともいわれる。⁽²¹⁾

その後、唐の開成三年(八三八)、仏舍利を納める石塔を建てたのに伴い、木蘭院は石塔寺と改められたが、南宋の嘉熙年間(一二三七—一二四〇)、石塔を揚州城内浮山観の西の寺院に移し、これをもまた石塔寺と称するようになった。のち、清の雍正七年(一七二九)、知県の陸朝璣が誤って城内の石塔寺に「木蘭院」の旧額を掲げ、これより両者はしばしば混同されるようになる。

この木蘭院と呉敬梓の小説とは、どのように関わるのだろうか。第一に注目すべきは、木蘭院の名を世に広めた王播の故事であり、第二は、揚州におけるその空間的な位置である。

王播(七五九—八三〇)は中唐、太原籍の人。字は明敷。⁽²²⁾貞元の進士である。寒門の出であったが、諸道塩鉄轉運使、礼部尚書、中書侍郎、同中書門下平章事、淮南節度使、尚書左僕射等の重職を歴任、太原郡公に封ぜられた。吏術に長じ、飢饉に際しても苛斂の姿勢を緩めず、権勢に従って浮沈し、姦邪の行ないがあったと評される。⁽²³⁾その木蘭

院をめぐる話は、次のようなものだ。⁽²³⁾

——王播は若い頃、身寄りもなく貧しかったため、揚州恵昭寺（慧照寺の別名）木蘭院に寄食していた。一日、その無為徒食を不快とした僧侶たちが、内緒で食事を済ませてしまい、王播が現われたときには、すでに膳は下げられたあとであった。二十余年後、長官として揚州に赴任した王播がさきの寺を尋ねてみると、かつて壁面に題した詩には、みどり色の絹のおおいが掛けられていた。そこで王播は旧詩に続けて二首の絶句を作り、次のように詠った。

二十年前此院遊、木蘭花發院新脩。

而今再到經行處、樹老無花僧白頭。

上堂已了各西東、慙愧闍黎飯後鐘。

二十年來塵撲面、如今始得碧紗籠。

第一首。二十年前、この寺に身を寄せたときは、木蘭（もくれん）の花が咲き、寺は新たに修築したばかりであった。今再び、かつて歩き回った境内を尋ねてみると、樹々は老い、花はなく、僧は白髪に変わっていた——。第二首。堂に入ってみると、食事はとうに終わっている。恥ずかしや、坊様にめしのあとで鐘を鳴らされるとは。詩を記した壁面は、二十年来、ちりやほこりに晒されて来たが、今ようやく、緑のベールでおおわれるようになった——。

王播の詩は、人の世の移り変わりと、貧窮・栄達によって態度を変える世俗の情とに対して発したものとされる。⁽²⁴⁾

そこでは、寺僧が王播によって批判されているわけだが、宋の元祐年間（一〇八六—一〇九四）、しばしばこの寺を訪れた蘇軾は、詩を作つて逆に王播を皮肉つた。「石塔寺」と題する詩にいう。

飢眼眩西東、詩腸忘蚤晏。雖知燈是火、不悟鐘非飯。山僧異漂母、但可供一莞。胡爲二十年、記憶作此訕。齋厨養若人、無益祇遺患。乃知飯後鐘、闍梨蓋具眼。⁽²⁶⁾

飢えて眼がくらみ、西も東もわからず、詩を作るのに夢中で、時の早い晚いも忘れてしまったらしい。燈とは火のことだとは心得ていても、鐘と飯が別物だとは悟らなかつたと見える。そもそも寺の僧と韓信を養い続けた老婆とはわけが違うのだ。一度、粗餐を提供すればそれで十分。なのにどうして二十年もたつてから、昔のことを譏めるのか。寺がこんな人間を養い続けたら、禍いの種をまくだけのこと。僧侶たちが食事のあとに鐘を鳴らしたのは、けだし人を見る眼があつたというべきだ――。

王播の碧紗籠の故事を構成するのは、一人の権力者の貧しい△過去▽と晴れがましい△現在▽であり、それぞれに対応する寺僧の態度である。王播は寺僧的なものを批判し、蘇軾はさらに、王播的なもの――忘恩と傲りを批判する。⁽²⁶⁾ そうして木蘭院においては、それらの一切が、古い都市を舞台にした古い物語――故事とそれに続くエピソード――として、連綿と語り伝えられているのである。

木蘭院はその意味で、揚州の歴史ないしは△過去▽をひきずる陰影の濃い場所であつた。いいかえれば、それは、揚州の都市としての△過去▽がわだかまる場所であつた。目と鼻の先にある茶館も、その点では例外ではないだら

う。人はそこでは容易に△過去▽に戻る事ができるのであり、また、△過去▽は、容易に蘇ることができるのである。

清代、木蘭院の後身である石塔寺と、石塔の移された城内の石塔寺とが混同されるようになったことは、すでに記した。呉敬梓の時代、城外の石塔寺はまだ残っていたようだが、「旧市街の木蘭院」（舊城里木蘭院——第二十三回）とあるように、小説で「木蘭院」とするのは、城外の本来のそれではなく、城内の石塔寺である。場所は「通泗門のやや南」⁽²⁷⁾。西へ向かつて「城隍廟、禹王廟、石塔寺」⁽²⁸⁾と続く「旧市街」の西のはしの一画である。

いうまでもなく、これは本来の石塔寺が、はるか西に位置するのには及ばない。しかし、少なくとも揚州城内について見る限り、小説中の「木蘭院」は、万雪斎の邸宅のある「河下」——「新市街」東南部の運河の街——から最も遠い、対極的な場所に位置していたのだといえる。歴史的事実としては、「木蘭院」と誤認された寺が西門付近に置かれていたのは、ほとんど偶然であつたろうが、しかし小説の内部では、「木蘭院」と茶館のある場所は、道士と牛浦とが、万雪斎の屋敷から遠ざかりうるだけ遠ざかった、ぎりぎりの地点、として読めるのである。

一体、かれらは何から遠ざかり、逃れようとしたのか。——たとえば、ほかならぬ万雪斎自身。あるいは万雪斎の力。または力の支配する空間。その空間の外へ出てはじめて、かれらは万雪斎のタブーに触れることができた。

「新市街」を離れ、「旧市街」に至る、より正確には、「河下」街から遠ざかり、「木蘭院」へ向かう二人の歩みが、一面において、時間を遡る歩みでもあったことは確かである。すでに見た通り、それは揚州の△現在▽から△過去▽へ向かう歩みであり、その歩みが辿り着いたところには、また、一人の人物の△過去▽と△現在▽をめぐる古い物語

が伝わるのであった。そうした歩みの中で、二人は万雪斎の△過去▽へ向かったわけだが、同時にそれは、万雪斎の支配する空間からの脱出行でもあったにちがいない。恐らく、道士と牛浦は、「木蘭院」近くの茶館まで来てようやく、万雪斎の王国から自由になった。逆にいえば、かれの邸宅から茶館までの距離、すなわち揚州の南あるいは東の一隅から西の一隅までの距離は、万雪斎の力——権力——の大きさを象徴する距離にはかならないのである。

(十六)

茶館の内部に移ろう。そこでは何が起こっていたか。

茶館では一壺の茶と、あめと豆が一皿ずつ出たきりである。あとは牛浦と道士の話が続く。

いうまでもなく、茶館はさまざまな人間が集まる場所である。そこで人々は茶を啜り、ことばを交し、何事かを語る。個人を演出する装置としての△もの▽は、そこには何一つないといってよい。万雪斎の屋敷が△もの▽の世界だとすれば、茶館はそれとは対照的な、△もの▽のない、△ことば▽だけの△語り▽の世界であるといえる。道士はここで万雪斎の秘密を明かしたのだが、同時に、△もの▽に圧倒され、萎縮した牛浦の△幻想▽が、その力を回復するのも、この茶館なのであった。△現在▽の支配する空間から遠ざかることによって、はじめて万雪斎の△過去▽が蘇ったように、牛浦は△もの▽の世界から遠ざかることによって、はじめて自らの△ことば▽を取り戻す。道士の△語り▽に先立って、牛浦は自らを次のように語るのである。

「……我一向在安東縣董老爺衙門里、那董老爺好不好客。記得我一初到他那里時候、纔送了帖子進去、他就連

忙叫兩個差人出來請我的轎。我不會坐轎、却騎的是個驢、我要下驢、差人不肯、兩個人牽了我的驢頭、一路走上
去。走到暖閣上、走的地板格登格登的一路响。董老爺已是開了宅門、自己迎了出來、同我手攬著手、走了進去、
留我住了二十多天。我要辭他回來、他送我十七兩四錢五分細絲銀子、送我出到大堂上、看著我騎上了驢、口里說
道：『你此去若是得意、就罷了、若不得意、再來尋我』這樣人真是難得。……」

（「……わたしはこれまで、安東県の董知事様のお役所にいたのですが、この董知事様が、たいそう客を大事に
される方です。今でも憶えています、わたしが初めてお訪ねしたときのこと。名帖を通したかと思うと、知
事様は大急ぎで用人を二人差し向けられ、わたしの轎をお招きになりました。わたしは轎ではなく、驢馬に跨っ
ていたのですが、下りようとしですと、用人らが承知せず、二人で驢馬の手綱を引きながら、ずうっと中に入っ
てまいります。応接室までまいりますと、床板がゴットンゴットン鳴りつ放しという有様でした。董知事様はと
うにお屋敷の門をおあけになり、御自身じきじきのお出迎えて、わたしの手をとって中に入れて下さり、二十日
あまりも引きとどめておかれたのです。いよいよ知事様においとまをして帰ろうとしますと、十七兩四錢五分の
糸銀を下さり、お役所の大広間まで送って来られて、わたしが驢馬に跨るのをご覧になりながら、『こののち、
志を遂げられればそれでよいが、もし意に満たぬときは、またわしを訪ねて来るように』とおっしゃるのです。
こんな方はめったにおりません。……」：第二十三回

董知事を賞讃する装いを取りながら、その実、自らを誇示する。牛浦がここで語っているのは、董知事がいかに客
を鄭重に遇するかではなく、自らがいかに知事から重んじられ、大事にされたか、である。むろん、これは牛浦の作

り話、でたらめにすぎない。とはいえ、牛浦はかつて、董挙人が知事の任につく以前、詩人牛布衣を装って董挙人の来訪を受け、親しく席を共にしている。またこののちかれは安東県に董知事を訪ね、実際に厚く遇されることになる。その意味では、ここに描かれた牛浦の自画像は、ニセ詩人としての自らの像を少しふくらませただけなのかも知れず、また、あるべき未来の像を先取りしているだけなのかもしれない。いずれにしても、ここにあるのは、知事の賓客——天上世界の一人——という虚構の像であって、小商人としての無名の若者の像でもなければ、万雪斎の屋敷から追放された惨めな姿でもない。官僚候補生としての匡超人が、景蘭江や蔣書記、さらには牛布衣や馮琢庵を相手に自らのイメージをふくらませたように、牛浦はここで道士を前に、自らにかかわる幻想——自己幻想を語っているのである。

牛浦と道士二人の△語り▽は、それぞれに△幻想▽と△過去▽という、実在し現存する世界のかなたにある領域をたぐり寄せ、繰り広げてみせる。牛浦は△幻想▽によって、惨めな自らの△現在▽を超えているだろう。道士は△過去▽を蘇らせることによって、万雪斎の△現在▽をおびやかすはずである。二人の△語り▽が示しているのは、△もの▽の支配する△現在▽、あるいは△現在▽をおおう△もの▽的世界を突き崩す手がかりとしての△ことば▽であり、△ことば▽の力と、その働きなのである。

牛浦の語る△幻想▽と道士の語る△過去▽とは、いずれも△ことば▽の作り出す世界である点で、ともに万雪斎の△もの▽的世界と対立している。しかし同時に、それらは一方が虚構を語り、他方が事実を語るという点で、また互いに対立する一面をもつ。虚構——芝居という意味では、牛浦の△ことば▽はむしろ、万雪斎の△もの▽と同じ役割を果しているので、万雪斎の邸宅が△もの▽——舞台装置によって構築される演劇的世界だとすれば、牛浦の自画像

は、幻想ないしは夢の△ことば▽△語り▽によって彩られる、これ自身極めて演劇的な世界にほかならないのである。

とすれば、第二の事件を、万雪斎の△芝居▽と道士による種明かしとの二つの要素に限って見ることは、些か片手落ちということにならう。畢竟、この事件にあって、壮大な舞台装置によって主の△過去▽を封じ込めた△もの▽の空間——万雪斎の屋敷は、また、同じ力によって、牛浦の△幻想▽を押し潰した空間であつた。同様に、道士の口を通して万雪斎の△過去▽を蘇らせた△語り▽の空間——茶館は、また、牛浦の△幻想▽を蘇らせた空間でもあつた。そして、すでに見たように、道士にタブーを破らせ、隠された歴史を語らせたのは、ほかならぬこの牛浦の△幻想▽、作り話にちがいないのである。

一見、事件には無用と思へた牛浦の△語り▽△幻想▽が、実は、道士の△語り▽——歴史あるいは真実を語ることば——を掘り起こす、てこの働きをしていたのだと言うことができる。

道士と別れ、宿に戻った牛浦は、万雪斎の依頼による薬材購入のため、牛玉圃から蘇州行きを命じられる。出立の前夜、牛浦は知事の次男坊の話と偽り、万雪斎の腹心の友として程明卿の名を挙げる。策略とも知らず、牛玉圃は宴会の席であえて程明卿との親交ぶりを披露し、万雪斎の怒りを買ひ、儀徴にとばされた揚句、絶交を言い渡される。事のからくりを知らされた牛玉圃は、蘇州の牛浦を人気がない場所に誘い出し、身ぐるみ剥いで袋叩きにしたうえ、牛浦を縛り上げたまま置き去りにする。

この結末は、道士の△語り▽の再現、というより、それ以上のものを含むだろう。第一に、道士が茶館で語った

△過去▽は、ここでは△語り▽としてではなく、現にある人物たちの表情や行動として、すなわちかれらにとっての現実——これ自体、小説という△語り▽の枠を出るものではないが——として現われている。読者は、万雪斎の羞恥と怒り、牛玉圃に対する絶交△追放に直に立ち会うことによって、△過去▽の蘇りを恐れ、封じこめようとする万雪斎、あるいはかれの暗い△過去▽と、△現在▽の力を、事実として感覚する。すなわち体験する。しかもより広く深いあたりで。

たとえば、儀徴にとばされた牛玉圃が、万雪斎の新店で、胸元に油垢をつけた例の「秀才」に出会うというエピソード。第一の事件でニセ秀才王義安をかきにかかって打ちすえた当の人物が、ニセ秀才万雪斎の店で、その親戚のために筆を揮うとは奇怪な話だが、しかし、発き立ててしかるべき人物が、口を封じられているだけでなく、逆に利用すらされているというところに、万雪斎のもつ力の強大さがあらわれている。同じ儀徴の船着場付近の料理屋で、牛玉圃が一人の給仕から万雪斎のタブーを知らされ、牛浦の騙りに気づく、読みようによっては、よその町のめし屋の給仕までが、万雪斎の△過去▽を知りつつ口をつぐんでいる、というエピソードも含めて、事件の結末は、万雪斎の△芝居▽が、予想外に規模の大きい、鞏固な世界としてかたち作られていることを、物語るのである。

そして第二に、再現以上というもう一つの意味は、この部分が、△過去▽の排除というにとどまらない、一種の懲罰をも含んでいることに関わる。結末は、表面上、万雪斎が△過去▽△程明卿につながる者として牛玉圃を追放し、騙されたと知った玉圃が牛浦をいためつける、というかたちをとる。しかし、万雪斎のタブーに触れた張本人は、実は牛浦というべきで、玉圃はかれに操られる代理人にすぎない。牛浦が半殺しの目に遭い、縛られたまま岸辺に捨てられる場面にしても、その懲罰の烈しさは、牛玉圃個人の怒りを超えているだろう。そこにあるのは、さながら権力

の禁忌を犯して刑に処せられた者のすがたであって、ここでも玉圃は、代理人——この場合は万雪齋の——のような趣きを呈する。ぶちのめされた牛浦を見おろしているのは、二人の大男と牛玉圃の三人だけだが、その背後に、一個の権力としての万雪齋の顔を見るのは、あながち不当とはいえぬだろう。そしてまた、この「賤民」出身の富豪「萬雪齋」の△芝居▽を、一つの暗喩として読むなら、その向うにさらに「夷狄」出身のより大きな権力——「滿洲族」皇帝を頂点とする「お上」の顔を見ることが、可能だろう。（万雪齋の屋敷を飾っていた「創業難」の対聯を思い出して頂きたい）。ついでにいえば、私は、城壁で囲まれ、隔てられた二つの空間、万雪齋の邸宅のある「新市街」と古寺「木蘭院」のある「旧市街」とを、それぞれ北京と旧都南京の暗喩として、さらには△語り▽の空間としての茶館を、作者の書齋の暗喩として、読みたい誘惑にも駆られるのだ。牛浦が作者呉敬梓だというのは必ずしもない。パトロン万雪齋と「名士」牛玉圃とをともに冷笑し、壮大な「舞台」で主役を演じる者の隠された△過去▽歴史を語ってみせた無名の道士に、小説『儒林外史』の作者、語る者としての呉敬梓の面影を見るのである。

(十七)

牛浦が牛玉圃の袋叩きに遭い、身ぐるみ剥がれた上、がんじがらめのまま岸边に打ち捨てられる、という第二の事件の結末は、事件に関わった側それぞれの事情に応じて、二つの性格を覗かせているように思われる。先に記したように、ニセ秀才万雪齋による、わが身のタブーを犯した者への懲罰、というのがその一つだが、一方、牛浦の側からすれば、この結末は、一人のニセ詩人の破滅、という意味合いをもっていよう。ホラ吹き少年（というより青年）の受刑は、かれの自己幻想の破綻に起因しているので、第二の事件は、ニセ秀才発見の顛末であると同時に、牛玉圃な

る人物——かれ自身、極めてうさん臭い存在ではある——を仲立ちとした、牛浦、万雪斎二人のニセモノ同士の対決でもあるのである。

結果は、万雪斎の勝利、牛浦の敗北、として現われたわけだが、振り返って、牛浦を敗北させ、瀕死の危機に追いやったかれの幻想ないしは八芝居／＼とは、どのようなものであったか。

茶館から戻った牛浦を、先に帰っていた牛玉圃が不機嫌な表情で迎える。留守番を命じておいたのに、勝手に街へ出てうろつくとは何事か、というのである。そこで牛浦はいう、

「適纔我站在門口、遇見敝縣的二公在門口過。他見我、就下了轎子說道：『許久不見』要拉到船上談談、故此去了一會」

（「ついさっき戸口のところに立っておりますと、県知事様の御次男が通りかかるのに出くわしまして、私をご覧になると轎を下り、『久しぶりだ』とおっしゃって、船まで引っぱり行っておしゃべりしようと言われるので、それでいっとき出かけてきたのです」：第二十三回

ここで話題に上がった「県知事様の御次男」（敝縣的二公）とは架空の存在であって、牛浦がその場しのぎにデッチ上げた人物である。その会話も行動も、すべて根も葉もない作り話なのだが、牛玉圃は「お上」（官）と会ってきたのだと聞いて、小言の口をつぐんでしまう。知事一族と親しいひとかどの文人、というのがここに描かれた牛浦の自画像であり、「お上」すなわち権力とつながることで権威づけられ、膨張した、あるいは持ち上げられた牛浦の像に、

牛玉圃は一目も二目も置き出したわけである。以下、「県知事様の御次男」を真に受けた牛玉圃は、それを土台にしたホラをすべて引き継ぐことによって、牛浦の幻想を自身の幻想に転化し、自らの手で増殖させてゆくのである。

因問道：「你這位二公姓甚麼？」牛浦道：「他姓李，是北直人。便是這李二公也知道叔公」牛玉圃道：「他們在官場中，自然是聞我的名」牛浦道：「他説也認得萬雪齋先生」牛玉圃道：「雪齋也是交滿天下的」

（そこで尋ねて「お前のその御次男というのは、名前は何というのだ」牛浦「李様といつて、北直隸の方です。この李様の御次男も、大おじ様を御存知でしたよ」牛玉圃「官界における以上、当然わしの名を聞いておるはずじゃよ」牛浦「万雪齋様ともお知り合いだ、とおっしゃっていました」牛玉圃「雪齋も交わりは天下に満ちておるのじゃ」：同

こうした幻想の積み重ねのうゑに、牛玉圃を陥れる罠が仕組まれる。

當夜牛玉圃買了一隻鶏和些酒、替他餞行。在樓上喫著、牛浦道：「方纔有一句話正要向叔公説、是敝縣李二公説的」牛玉圃道：「甚麼話？」牛浦道：「萬雪齋先生算同叔公是極好的了。但只是筆墨相與、他家銀錢大事、還不肯相托。李二公説、他生平有一个心腹的朋友、叔公如今只要説同這个人相好、他就諸事放心、一切都托叔公、不但叔公發財、連我做姪孫的將來都有日子過」牛玉圃道：「他心腹朋友是那一个？」牛浦道：「是徽州程明卿先生」牛玉圃笑道：「這是我二十年拜盟的朋友。我怎麼不認的？我知道了」

（その夜、牛玉圃は一羽の鶏と酒を買い求め、牛浦の餞はなむけをした。楼上で料理を口にしながら、牛浦が言った。「さっき大おじ様にお話ししようと思っていたことがあるのです。李知事様の御次男がおっしゃっていたことなのですが」牛玉圃「何だね」牛浦「万雪斎様は、大おじ様とはご昵懇の間柄といえましようが、しかし単に詩文のお付き合ひだけで、お邸の財産のような重大事はお任せになりません。李様の御次男がおっしゃるには、あの方には、日頃、腹心の友が一人おられる、大おじ様が、今もし、この方と親しいのだ、とおっしゃりさえすれば、万雪斎様は何事も安心なさって、一切大おじ様にお任せになる、そうなれば、大おじ様がお金持ちになれるばかりか、また甥の私にしても、将来は生活の道が開ける、というのです」牛玉圃「雪斎の腹心の友というのは誰だね」牛浦「徽州の程明卿様です」すると牛玉圃は笑って、「そりゃ、わしが二十年来誓い合った親友じゃよ。わしが識らいでか！ ウム、わかった」：同

際限もなくふくらむ幻想と、一片の事実あるいは歴史。膨張を重ねる牛浦の幻想の中で、唯一の例外は「程明卿」の名である。この危険な過去の人物、すなわちトゲのある歴史を包み込むために、牛浦は甘美な幻想を紡いだのだといつてよい。歴史は幻想の外被を得て、融通無礙に動き出す。万雪斎にとって最も忌まわしい過去の人物が「腹心の友」に仕立てられ、牛玉圃の「二十年来」の義兄弟を装って、万雪斎の前に現われようとする。あくる日の万雪斎の邸での酒宴の場面、ここでは、牛玉圃を媒介として、牛浦の幻想——正確には、歴史を包み込んだ幻想、あるいは幻想に包まれた歴史——と万雪斎の幻想とが衝突するのである。

萬雪齋道：「這話不錯、一切的東西是我們徽州出的好」顧鹽商道：「不但東西出的好、就是人物也出在我們徽州」牛玉圃忽然想起、問道：「雪翁、徽州有一位程明卿先生、是相好的麼？」萬雪齋聽了、臉就緋紅、一句也答不出來。牛玉圃道：「這是我拜盟的好弟兄。前日還有書子與我、說不日就要到揚州、少不的要與雪翁叙一叙」萬雪齋氣的兩手冰冷、總是一句話也說不出來。顧鹽商道：「玉翁、自古『相交滿天下、知心能幾人』。我們今日且喫酒、那些舊話不必談他罷了」當晚勉強終席、各自散去。

（萬雪齋「おっしやる通り、何から何まで、わが徽州の産のが一番ですな」顧鹽商「ものが一番というだけでなく、人物にしても、わが徽州より出ておりますぞ」牛玉圃はハッと想い出し、尋ねて「雪殿、徽州には程明卿というご仁がおりますが、ご呢懇でしょうか」萬雪齋はそれを聞くと、顔が真赤になり、ひとことも返事が出来ない。牛玉圃が続けて「これはわたしが誓い交した義兄弟でして、一昨日、手紙を寄越して申すには、近いうちに揚州にまいって、是非、雪殿とお話しをしないと、こう言うのですわい」萬雪齋は腸が煮えくり返って、両手は氷のように冷たくなり、一言もものが言えない。顧鹽商が「玉殿、昔から『交わりは天下に満つるも、心を知るはいくたりぞ』と申しますぞ。今日はひとまず酒にして、そんな昔話はよしでしょう」その晩は、どうかこうにかお開きにして、各々引き取って行った）：同

牛浦はここで、牛玉圃に復讐しているだけでなく、萬雪齋に対しても復讐しようとしているのである。牛浦が牛玉圃に罌を仕掛けたのは、牛玉圃が萬雪齋の邸から牛浦を追いつ出し、「晴れの場」（臺盤）すなわち饗宴の舞台から疎外したことによっている。牛玉圃がやがて萬雪齋から絶交状を叩きつけられ、かれ自身が「晴れの場」から締め出され

ることで、牛浦の復讐は完成するのだが、しかしもといえ、牛浦が万雪斎の巨大な舞台装置に圧倒され、あるじの問いにひとことも答えられなかったのが、そもその発端であった。万雪斎が牛玉圃の問いに沈黙を強いられたこの場面は、その意味で、まさしく牛浦の沈黙に対応するものだろう。あえていえば、沈黙する万雪斎は、先の牛浦自身であるといえるかも知れない。牛浦が万雪斎の幻想（その主要な表現が、舞台装置としてのかれの邸宅であった）に圧倒されたのに見合う、あるいはそれを再現するかたちで、いま、万雪斎は牛浦の幻想（程明卿の影）に圧倒され、自身、「晴れの場」から転落しかかっているのである。それは、牛浦の万雪斎への復讐であるといつてよい。牛浦の復讐は、おのれを疎外した「天上世界」への復讐であり、その結果、復讐された者たちは、牛浦と同じ高み、というより低みへ転落し、あるいは転落の危機に瀕するのである。この牛浦の幻想による復讐は、『儒林外史』における幻想ないしは△語り▽の性格を考える上で、十分注目に値しよう。

牛浦の挑戦は「天上世界」の一角を切り裂くものだ。裂け目から覗くのはニセモノとしての万雪斎の顔であるが、それはまた牛浦の顔でもあり、要するに「地上」の人間の顔である。しかし「天上世界」は「程明卿」を再び過去へ押し戻す（「……そんな昔話はよしましう」）ことによって裂け目を修復し、さらには、この危険な人物を現在に呼び寄せようとした牛玉圃と牛浦とを追放して、自らの世界を閉鎖する。

ここで注意すべきは、第一に、牛浦と万雪斎の対決において、結局は牛浦的な幻想が万雪斎的な幻想に押し伏せられていることである。それは歴史を包み込んだ幻想、あるいは幻想に支えられた歴史、の敗北を意味するだろう。

そして第二に、「天上世界」は万雪斎を含み込んだまま、すなわち「地上」の人間を含み込んだまま閉じるのであ

て、このとき、牛浦を追放した「天上世界」は、その反面で、もう一人の牛浦を自らのうちに留めたのだといえる。このニセ秀才万雪斎のありようは、むしろ、牛浦自身の行く末と無関係ではない。

そして第三、牛浦が万雪斎を危機に追い込みながら、その反撃に対して全く無力であったのはなぜか。問題は恐らくは、かれらの幻想の共同性に関わっているだろう。たとえば、万雪斎を撃ち、危機に追いやった牛浦の幻想は、かれ個人のそれというより、牛玉圃に共有された幻想であった。幻想は共有されることによって膨張し、また、強大となる。同様に、万雪斎を危機から救い出し、攻撃を可能にしたのも、その集団的な幻想であった。万雪斎による反撃の中で、牛玉圃が牛浦から離反したことはすでに見た通りだが、玉圃の離反によって、牛浦は自らの幻想の共有者を失い、孤立するのである。

牛浦は、この孤立の中で敗北する。かれの敗北は、孤立した幻想の敗北である。むしろ、この場合、かれの幻想の孤立と共同の分れ目が、幻想の質のいかんによることはいうまでもない。第二の事件の結末にあるのは、一人のニセモノの△死▽であるが、もし牛浦に再生が可能であるとすれば、そこで紡ぐべき幻想はどのようなものでなければならぬか、その答えを、牛浦は自らが敗北した事件の中に読みとらねばならないのである。（この章続く）

（注）

（1）本篇に先立つ部分は、以下の場所に発表した。

（上）：『論集』第二十七号人文編（札幌商科大学、一九八〇年八月）。

（中）——Ⅰ：同第三十号人文編（同、一九八二年三月）。
（中）——Ⅱ：同第三十三号人文編（同、一九八三年七月）。

（2）『儒林外史』臥閑草堂本（嘉慶八年刊。人民文学出版社、一九七五年影印）第二十一回回評
竊財物者謂之賊、竊聲名者亦謂之賊。牛浦既竊老布衣之詩、

又竊老僧之饒磬等件、居然一賊矣。故其開口便是賊談、舉步便是賊事、是書中第一等下流人物、作者之所痛惡者也。

(3) 『大明會典』卷七十七「礼部」科挙。

(4) 『大清會典』卷二十五「礼部」。

(5) 同前卷十一「戸部」。なお、省略した部分は、山西・陝西の「楽戸」、江南の「丐戸」、浙江の「惰民」、広東の「蛋民」、浙江の「九姓漁戸」など、特定の地方に居住する「賤民」について記述する。

(6) 清、趙翼『陔余叢考』卷三十八「底下人」

俗稱奴僕爲底下人。南史陳伯之傳、褚綢謁范雲、雲不見、綢怒曰、建武以後、草澤底下、悉成貴人。吾何罪而見棄。唐洋州刺史趙臣議選舉疏、有曰、授官多底下之人、修業抱後室之嘆。

(7) 清、黃小田評、李漢秋輯校『儒林外史 黃小田評本』(黄山書社、一九八六年)二二二頁。

(8) 元、曾先之『十八史略』卷五、唐

(9) 唐、吳兢『貞觀政要』卷一「論君道」

貞觀十年、太宗謂侍臣曰、帝王之業、草創與守成孰難、……。

(10) 清、史襄哉『中華諺海』(民俗・民間文学影印資料之伍、上海文芸出版社)五九頁に次の二種を掲げる。

創亦難、守亦難、知難不難。

北大文学部紀要

創業容易守業難。

(11) 黄小田の評(前掲黄小田評本二二二頁)に「偏是此等人家有此等對聯」といい、清、天目山樵の評(天二評。李漢秋輯校『儒林外史 会校会評本』、中国古典小説研究資料叢書、上海古籍出版社、一九八四年、三〇八頁)に「此聯頗有意思」という。

(12) 臥閑草堂本をはじめ、諸本は「澄郷」とする。今、蘇州潘氏抄本が「沉香」とする(前掲会校会評本三二二頁)のに従う。

(13) 李曉東は『中国封建家礼』(中国風俗叢書、陝西人民出版社、一九八六年)一七六頁に、家が没落し、昔の召使いとめあわせられた娘が、結婚の日に初めてそれと知り、同房を拒んで自ら命を絶った話を紹介し、次のようにいう。「こうした尊卑の關係は、いつまでも変わることがなく、一日でも主従の關係が結ばれれば、たとえその後、情況が変わって、主人が乞食に落ちぶれ、召使いが金持ちになったとしても、この召使いは昔の主人の前では、依然として卑しいままなのである」。

(14) 『揚州府志』(摺——清・尹會一、程夢星等纂修、清雍正十一年刊本——影印、中国方志叢書、華中地方、第一四六号、成文出版社有限公司)卷之五「城池」

嘉靖乙卯、知府吳桂芳以倭寇請於上官、接東郭建外城、即

宋大城之東南隅也。工方輿、以遷去、後守石茂華繼之。起舊城東南角循運河而東、折而北、復折而西、至舊城東北角止。約一十里、爲一千五百四十一丈九尺。高厚與舊城等。今稱曰新城。爲門七、南曰挹江（今日鈔關）、曰便門（今日徐寧）、北曰拱宸（今日天寧）、曰廣儲（初亦曰鎮淮）、曰便門（今日便益）、東曰通濟（今日缺口）、曰利津（今日東關）。嘉慶本『揚州府志』（摺——清・阿克當阿等修、姚文田等纂、清嘉慶十五年刊本——影印、同、第一四五号）卷之十五「城池志」にもほぼ同様の記述が見えるが、「新城」の建設開始を一年遅く嘉慶三十五年（丙辰、一五五六）とする。

- (15) 『揚州画舫錄』（乾隆六十年序、世界書局、一九六三年）巻九「小秦淮錄」。

- (16) 同前。

- (17) 同前。

- (18) 『江都県志』（摺——清・高士鎬修、五格等纂、清乾隆八年刊、光緒七年重刊本——影印、中国方志叢書、華中地方、第三九三号、成文出版社有限公司）図式「江都県城原図」。江都県は揚州府に属する県で、県役所が揚州府城内にあるため、右の「原図」は、そのまま揚州府城の地図として読むことができる。ちなみに、前掲雍正本『揚州府志』所収（巻之一）の「揚州府城池図」は、公署・寺觀等の記載のみで、街巷の表示がなく、「木蘭院」はあるが、「河下」はない。また、嘉

慶本『揚州府志』所収（巻首、輿図）の「揚州府城池図」は、「江都県城原図」に対して字体・図様を異にし、二、三、地名を連えるほか、鮮明さに欠ける点を除けば、基本的に同一の内容を示している。

- (19) (15) に同じ。

- (20) 同済大学城市規劃教研室編『中國城市建设史』（中国建筑工業出版社、一九八二年）一〇四—一〇五頁。

- (21) 前掲雍正本『揚州府志』巻之二十五「寺觀」、嘉慶本『揚州府志』巻之二十八「寺觀志」一、「江都県志」巻之十七「寺觀」、および許鳳儀・朱福娃『揚州風物志』（江蘇人民出版社、一九八〇年）六四頁。木蘭院の所在を「西門外」とするのは前三者、「桑樹脚」とするのは後者。以下、木蘭院についての記述はこの四者に拠る。

- (22) 『旧唐書』巻一百六十四「列伝」第一百一十四。『唐書』巻一百六十七「列伝」第九十二。

- (23) 五代、王定保『唐摭言』巻七「起自寒苦」。

- (24) 前掲『揚州風物志』六五頁。

- (25) 『東坡全集』（四部備要本）後集第三巻。なお、『蘇文忠詩合註』、『増刊校正王狀元集註分類東坡先生詩』、前掲『江都県志』等により第一句「東西」を「西東」に、第七句「三百年」を「二十年」に改める。

- (26) 前掲『揚州風物志』六六頁。

(27) 前揭雍正本『揚州府志』卷之二十五「寺觀」

國朝雍正七年、知縣陸朝璣復木蘭院舊額、……記曰、

……雍正戊申、余奉命宰江都惟。徐觀察康公爲余言、惟揚古

蹟有木蘭禪院、爲唐相王播題詩處、今額改名石塔寺、全非舊

觀、亦守土者之所當留意也。余敬諾以行、及至邑、於通泗門

內稍南上、得石塔寺焉。

(28) (15) に同じ。